

Algebraic Epistemology

倉永 崇 (Takashi Kuranaga)

名古屋大学大学院多元数理科学研究科 博士後期課程

「“ことば”と認知的な装置のモデル」に関する私自身の研究の中から，“ことば”を表現論的に取り扱おうとする際に生じる問題を本発表において取り上げる。

“ことば”を，人の脳や人工知能などの認知的な装置に対する入力とみなすとき，“ことば”を偏微分方程式系と同じように代数的に扱うためには，幾らかの条件が必要となる。

性質のよい代数的なオペレーターないし論理的なオペレーターが認知的な装置に入っている場合にはそれほど強い条件を課す必要はないが，そのようなオペレーターが1つもないような装置には，かなり強い条件を課す必要が出てくる。しかしながら，当然のことではあるが，条件を加えすぎれば自明なモデルが出来上がってしまうので，ことばと認知のモデルとして自明でないものにするためには，認知的なオペレーターに関する条件と“ことば”の性質に関する条件とのせめぎ合いを通過しなければならない。

今回は「または」に相当するオペレーターや，認知的な装置に作用するものとしての“ことば（文）”の冪等性などを中心に，上に記した，せめぎ合いについて述べる。